

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(本文の表記の一部を変えています。)

小さいときから、忘れるのはよくないこと、困ったことだと思いきまされている。学校で勉強したことはよく覚えておけ、忘れてはいけない。覚えているかどうか確かめるために、忘れたところに試験をする。忘れてまちがうと減点というばつを受けるから、いつとはなしに、忘れることをオゾマシキやつかい者のように思って大きくなる。

忘れないで、よく覚えて記憶力のよいのは「頭がいい」とされ、逆に、忘れっぽいのは「頭が悪い」と決めつけられる。忘却は貧乏神びんぼうがみ以上におそろしい。少なくとも、成績不振ふしんのもと、悪いのは忘れる頭である、と決めつけるのである。忘却からすれば、とんだ①ぬれぎぬである。世間は大きな誤解をしていることに気づかない。文化が発展、学問・技術の進歩と発達の目ざましい現代においてなお、②年来ねんらいのかんちがいを注<sup>1</sup>是正せいせいするにいたっていない。不思議なくらいである。

忘却は困ったことではない。それどころか記憶と同じくらいに大切な心的活動である。両者は、対立関係にあるのではなくて、セットとして、共同のはたらきをしていると考えるべきである。忘却がなくては記憶が存在しないし、忘却がなくては記憶はその力を③ハツキできない。車の両輪のようなものだ、ということもできるが、呼吸のようなものと考えた方が注<sup>2</sup>妥当だとうであろう。

呼吸も吸うか吐くか吐はくかただけではその役割を有効に果たすことができない。空気を吸って、その空気をまた吐く。それが呼吸のように思っている人がきわめて多く、④タイソウたいそうの深呼吸でも、まず深く息を吸って……と号令する。順序が逆である。まずぎりぎりまで息を吐いて、そのあと新しく空気を吸いこむ。それが呼吸で、現に呼はくが先になっている。呼吸ということばをこしらえた人はよく考えていたのである。

それはさておき、記憶と忘却の関係は呼吸によく似ているということをはかたところである。呼と吸が別々ののはたらきではなく、反対の作用でありながらたいがいを助け合っている。⑤その点ちんてんが、記憶と忘却に通じるのである。記憶だけでは本当の記憶にならず、忘却という反対の作用によって記憶が深まり、活発になる。一方を切りはなして単独に考えるのは正しくない。忘却あつての記憶であり、記憶あつての忘却である。

もうひとつ、呼吸と記憶・忘却を通じて見落とされてはならないのが、順序である。呼吸において息を吐くのが先、吸うのは後であると同じように、まず先行すべきものは忘却であり、記憶が続くという順序を認める必要がある。息を吐くのが吸うより先だ、と言うと、吸わないと、吐く息、空気がないではないかと反論する人がいる。誤っている。⑥まず吐いて、残っているよくない空気を全部出してしまつてから、きれいな空気を十分に吸いこむ。これが深呼吸である。吸いこむのを先行させれば、肺臓によれた空気が残つてしまう。十分な換気にならない。

それと同じで、忘却が先行する。そうあるべきである。記憶の前に忘れられるか、何を忘れるのかなどというのは、考えが足りない。忘却によって、乱雑になつてゐる頭の中をきれいにそうじする。ゴミのようなものがあつたら捨てる。それが忘却である。

忘却によつて整理され、きれいになつた頭で新しい知識、情報などを取り入れる、それで記憶がはたらくのである。⑦コンラシ、不要なものでいっぱいになつた頭では記憶は十分にその能力を發揮することが難しい。忘却に注<sup>3</sup>露<sup>3</sup>払いしてもらわないと、記憶ははたらくにくいというわけである。

もうひとつ、忘却について常識に誤つてゐることがある。なにかというと、忘却とはやみくもに、すべてを忘れてしまふことのように考へてゐることである。正統<sup>せいとう</sup>の忘却は決して百パーセントの忘失ではない。忘れるところと、記憶のままを残す部分とを区別する。その区別、分別、取捨をほとんど無意識のうちに行つてゐるのはおどろくべきである。

取捨の判断は、その人間の、深層化してゐる価値観、好悪、利<sup>8</sup>、快不快などの作り上げているネットワークを通すこと<sup>注4</sup>暗々裏<sup>あんあんり</sup>に行われる。きわめて個人的、個性的で忘れ方は人によつてみなちがう。

知識の記憶はそういう個性化作用を受けないから、完全な記憶は没<sup>ぼつ</sup>個性的である。つまり個性的ではないのである。だれもが同じように記憶できる。試験で百点満点の答案は、何人あつても同じ答えをしてゐる。⑨、忘却作用がはたらいて、欠損部分がある答案は、十人<sup>10</sup>、それぞれのところでまちがつてゐる。同じ八十五点の答案がいくつあつても、それぞれ異なつたところで、まちがつてゐる。まったく同じところで、同じようにまちがえてゐる答案があれば、カンニングを疑つてよい。それほど、忘却では個人差がはつきりしてゐる。

知識の記憶のみによって、個性をはぐくむことはできない。知識も記憶も、そのままでは個性的なものではない。忘却はひとりひとり独自の忘れ方をする点で、個性的である。没個性的な知識を⑩シユウトクすることを通じて個性が生まれるのは、つまり忘却の作用によるのである。個性の⑪ソynchヨウがやかましく言われるようになったのにもかかわらず、個性の源泉が忘却にあることを知らずにいるのは、いかにものんきである。

コンピューターは記憶の巨人<sup>キョウジン</sup>である。単純記憶において、コンピューターにまざる人間は存在しないと行ってよい。完全に大量の情報を記憶し、それを操作、処理する能力を持っている。完全記憶を実現しているが、個性がない。忘却ということを知らないからである。記憶だけなら人間はコンピューターにかなわないが、忘却と記憶のセットで考えれば、人間はコンピューターのできないことをなすとげる。この点からすれば、忘却は⑫新しい役割を認められなくてはならないことになり、⑬これまでの忘却観は一変しなくてはならないはずである。忘却が個性化をすすめ、創造的はたらきの土台であるのに目を向けないのは知的<sup>注5</sup>怠慢<sup>たいまん</sup>である。

忘却は力である。忘却力は破壊的<sup>はかい</sup>ではなく、記憶力を支えて創造的はたらきをもっている。

『忘却の整理学』外山滋比古

注1 是正・・・正しく直すこと。

注2 妥当・・・適切であること。

注3 露払い・・・先立って仕事をする事。

注4 暗々裏に・・・人の知らないうちに。

注5 怠慢・・・なまけてやるべきことをやらないこと。

問一 ――部①「ぬれぎぬ」・②「年来」の意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

①「ぬれぎぬ」 ア あまりにわざとらしく、あきれてものが言えなくなること。

イ いくら力を入れても何も手ごたえのないこと。

ウ 人目をごまかすためにうわべをかざること。

エ しゃくにさわってどうにもがまんできないこと。

オ 悪いことをしていないのに自分がしたように言われること。

②「年来」

ア 近年 イ 通年 ウ 長年 エ 晩年 オ 例年

問二 ――部③・④・⑦・⑪・⑫のカタカナを漢字に直しなさい。

問三 ――部⑤「その点」とはどのような点か。文中の言葉を使って三十文字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れます。)

問四 ――部⑥「まず吐いて、残っているよくない空気を全部出してしまってから、きれいな空気を存分に吸いこむ」とあるが、

この呼吸の順序と同じように、記憶・忘却の順序について文中の言葉を使って七十文字程度で説明しなさい。答えの中に必ず「記憶」と「忘却」という言葉を使い、その言葉の横に線を引きなさい。

問五 部⑧・⑩に当てはまる言葉を、⑧は漢字一字、⑩は漢字二字で書きなさい。

問六 部⑨に当てはまる最も適当な言葉を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア あるいは イ さらに ウ それで エ だから オ ところが

問七 ――部⑬「新しい役割」について、筆者は「忘却」の役割をどのようなことだと考えているか。文中から九字でぬき出しなさい。(句読点は字数に入れます。)

問八 ――部⑭「これまでの忘却観」について、世間ではこれまで「忘却」をどのようにとらえていたのか。それを説明した次の

文の 部 A・B に当てはまる言葉を、本文全体からそれぞれ十五字以内でぬき出しなさい。(句読点は字数に入れます。)

忘却とは  A  B であり、  B であるというところを方。

問九 筆者の考えに**合わないもの**を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 世間では記憶力のよいのを「頭がいい」、忘れっぽいのを「頭が悪い」と決めつけているが、これは大きな誤解である。
- イ コンピューターは完全に大量の情報を記憶するが忘却ということを知らないから、人間とちがって個性というものがない。
- ウ 記憶は記憶単独では本当の記憶にならず、忘却という反対の作用があることによって深まり、確かなものとなる。
- エ 知識の記憶も忘却もそれぞれ個人差がはっきりしていて、ひとりひとり独自のものがあり、そこに個性が生まれる。
- オ 忘れるところと、記憶のままを残す部分との区別・取捨の判断は、それぞれの考え方や感じ方の影響を受けて行われる。

このページには問題はありません

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(本文の表記の一部を変えています。)

二日目の最終種目、100メートル自由形の予選が始まった。この種目にエントリーしているのは、ボクと二年の原田、そして一年の省吾(しょうご)の三人だ、登録記録の①ハヤい順から各組にふり分けられる予選で、なんとボクと省吾が同じ第三レースで泳ぐことになった。

「凌雲先輩、だめ、やっぱりおれだめ。②ゼツタイに最後まで泳げるわけない」

レースを待つテントの中で、横にすわった省吾が体をふるわせていた。ボクはたった今、第一レースで泳ぎ終わった、聖マリアンヌの田島の記録が気になって仕方なく、食い入るように電光掲示板(けいじばん)の表示を見ていた。

「凌雲先輩、やっぱり棄権(きけん)しようかなあ……」

「③ちよつ、ちよつとだまつとれ！」

56秒76、聖マリアンヌの田島は予選で57秒を切って泳いだ。

応援席(おうえん)の歓声(かんせい)が突然大きくなった。それは第二レースで泳ぐ原田を応援するわが部員たちの声援だった。他の学校に比べ人数が少ないにもかかわらず、声援だけははずかしくらい大きい。昨年までの決まっていた応援方法をやめ、思い思いの声を上げるようになったのがこうなった原因だと思う。原田が両手をふってみんなの応援にこたえる後ろ姿が見える。スタート台に立った他の選手たちが神妙(しんみょう)すぎるくらいの中で、原田のふざけた態度が、より目立っている。

「原田！バク転しろ！」

ボクがテントの中から叫ぶと、ふり返った原田がニヤツと笑い、スタート台の上から空中で一回転してプールに落ちた。観客席から大きな笑い声が沸き上がった。

すぐかけ寄ってきた係員から原田は厳しく注意されているようだった。声をかけたボクのところにもすぐに監視員(かんし)が④アラワレ、冷たく注意されてしまった。

「すいませーん。まさか本当にやるとは思わなかったの……」

おこられているボクを見ながら、となりで省吾が必死に笑いをたえていた。

「なあ。省吾。⑤今日の夜までには100メートル泳ぎ終われよ。朝までは待てんぞ」

「一人だけおそかったら、みんなに笑われるやろうなあ」

「大丈夫、大丈夫。お前がゴールするころには、みんなこの会場から帰つとる」

「もう、少しははげまして下さいよお」

プールでは原田が泳ぎ終わったようだった。テントからはプールの中の様子が見えない。電光掲示板に表示された原田の記録を見ると、決勝には残れそうになかった。

「さあ！第三レースの選手は位置について！」

係員の声に、ボクと省吾は勢いよく立ち上がった。他の選手と並んでスタート台に向かうとき、泳ぎ終わりテントにもどつていた聖マリアンヌの田島が「がんばれよ！」と声をかけた。ボクは片手で手を上げてそれにこたえた。

選手紹介が終わり、スタート台に立った。予選だということもあり、それほど緊張はしていない。それより一番端のコースに立っている省吾のことが少し気になる。

スタート台から眺めるプールの⑥ケシキは絶品だ。風が作る小さな波に太陽が反射している。ボクはプールが好きだ。たぶん海よりも好きだ。一言で言ってしまうえば、プールは男らしくない。そして何より押しつけがましくないのだ。清潔で、清白で、そして危険のないプールがボクには合っているように思う。

ホイッスルが鳴った。スタート台に立つと、時々こんなことを思う。

『なんでもそうだが、何かを始めるときの自分が……』

「位置について！用意！」

『何かを始めるときの自分が、一番臆病で、そして一番勇敢だ』

「スタート！」

最高のスタートを切って水の中に飛びこんだ。手のひらが水をつかんでいる確かな手ごたえがある。体が水に乗っている確かな感触がある。

50メートルのターンを切ったところでありあまる力を感じた。先頭を泳いでいるのは確かだった。勢いあまって、今にも体が水面から飛び上がりそうな気さえする。

壁に激突する勢いでゴールし、振り返って電光掲示板を見ると、一番上にボクのタイムがある。

観客席からみんなの歓声が聞こえた。56秒99。

とうとうボクは57秒の壁を破った。聖マリアンヌの田島の記録にはおよばなかったが、予選を二位で通過することになった。

ちようどそのとき、<sup>⑦</sup>観客席から笑い声が起こった。とっさに省吾のコースへ目を向けると、やっとターンを終えた省吾が、ほとんどおぼれているように泳いでくるのが見えた。

ボクはあわててプールを飛び出し、省吾のコースへとかけ寄った。

「泳ぎ終わったひとはテントに戻って！」

注意する係員の手を払いのけ、大声で省吾に叫んだ。

「来い！ここまで来い！」

来い、ここまで来い。ここまで来れば、おれがプールから引き上げてやる。お前のことを笑ったやつを一人残らずけとばしてやる！来い！ここまで来い！

息つぎの角度がどんだん空に向かってる。手と足のバランスがどんだんくるってくる。水中でもかく省吾の体はすぐそこまで来ていた。すぐそこまで……。

<sup>⑧</sup>観客席での笑い声が、沈黙へと変わった。ボクの手を引っ張っていた係員の手に入るのが分かった。水から上がる省吾の顔が、苦痛と<sup>⑨</sup>希望とでぐにやぐにやにゆがんでいる。

あと10メートル。ボクは目をつむった。

観客席から秋風のような拍手が聞こえる。ゆっくりと目を<sup>⑩</sup>ア<sup>⑩</sup>け、プールの中をのぞきこむと、省吾の顔があった。<sup>⑪</sup>生まれて初めて100メートルを泳ぎ切った男の顔が、そこにあった。

息も出来ぬほど苦しいのだろう、声も出せずに「凌雲先輩」と口が動いた。あえぐように、「最後まで泳いだよ」と省吾が言った。ボクは泣くもんか、と思ったけど<sup>⑫</sup>涙が止まらなかった。

『最後の息子』吉田修一

問一 — 部①・②・④・⑥・⑩のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 — 部③「ちよつ、ちよつとだまつとれ！」と言った理由を、文中の言葉を使って二十五字以内で書きなさい。  
(句読点は字数に入れません。)

問三 — 部⑤「今日の夜までには100メートル泳ぎ終われよ。朝までは待てんぞ」と言った「ボク」の気持ちとして適当なものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 省吾の緊張を少しでもやわらげてあげよう。

イ また原田が係員に注意されたら大変だ。

ウ 朝までにみんなが帰ってしまったらどうしよう。

エ 省吾に力を出し切って最後までがんばってほしい。

オ 省吾が観客に笑われたらかわいそうだ。

問四 — 部⑦「観客席から笑い声が起こった」とあるが、「笑い声」は、だれのどのような様子に対してのものか。解答らんに合うように、二十五字以内で文中からぬき出しなさい。(句読点は字数に入れません。)

問五 — 部⑧ 「観客席での笑い声が、沈黙へと変わった」理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 水中でもがく省吾の姿を見てあきれたから。

イ 必死にゴールしようとする省吾に心打たれたから。

ウ 息つぎの出来ない省吾の苦しみがわかったから。

エ ボクが怒っていると観客たちが思ったから。

オ 笑っていると係員に注意されると思ったから。

問六 — 部⑨ 「希望」は、どういう希望か。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 観客からあたたかい拍手をもらいたいという希望。

イ なんとか100メートルを泳ぎ切りたいという希望。

ウ 少しでもはやく泳ぐのをやめたいという希望。

エ 息もできない苦しさからのがれたいという希望。

オ 先輩にもっとほめてもらいたいという希望。

問七 — 部⑩ 「生まれて初めて100メートルを泳ぎ切った」省吾の気持ちに当てはまらないものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 解放感      イ 安心感      ウ 緊張感      エ 達成感      オ 満足感

問八 — 部⑫ 「ボク」が「涙が止まらなかった」理由を五十字以内で説明しなさい。(句読点は字数に入れません。)